ー文化の薫る活力ある地域づくりをめざしてー　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」20 号の発行

2. 普及講座の開催
「シュワーベ先生と
幾何学でつくるアートの世界」
講　師／カスパー シュワーベ
期　日／平成 28 年 4 月 30 日（土）
平成 29 年 3 月 18 日（土）
会　場／勝央美術文学館

「シュワーベ先生と幾何学で
つくるアートの世界」の様子

「木版画の刷りに挑戦！多色刷りを学ぶ」
講　師／瀬戸内版画会メンバー
期　日／平成 28 年 11 月 19 日（土）
会　場／勝央美術文学館

「消しゴムハンコを使って絵本
を作ろう」の様子

「消しゴムハンコを使って絵本を作ろう」
講　師／松岡奈緒美（イラストレーター）
期　日／平成 29 年 3 月 11 日（土）
会　場／勝央美術文学館

（その他）
陶芸入門講座（年 8 回）
絵画教室（年 10 回）
ちるどれんずあーとプログラム（年 5 回）
夏休みこども体験講座「写生教室」

「陶芸入門講座」の様子

3. 事業協賛に伴うＰＲ活動
「金時祭花火大会」への協賛

芸術文化活動事業

【主催事業】
■絵画展の開催
○第 13 回ミマサカコドモ絵画展
会　期／平成 29 年 1 月 6 日
～平成 29 年 1 月 29 日
会　場／勝央美術文学館
展示室・町民ギャラリー 1・2

「ミマサカコドモ絵画展」
会場風景

○gallery exhibition vol.29
平井林太郎・松岡奈緒美・吉田彩花作品展
会　期／平成 29 年 2 月 26 日
～平成 29 年 3 月 26 日
会　場／勝央美術文学館
町民ギャラリー 1

「平井林太郎・松岡奈緒美・吉田彩花
作品展」会場風景

【共催事業】
■芸術鑑賞事業
トム・プロジェクトプロデュース
風間杜夫ひとり芝居「正義の味方」

■企画展の開催
《文学》
○小企画 34「うぐいす物語 –木村毅と石川文平」
○コレクション展 vol.36
郷土の画家シリーズ「赤堀佐兵没後 55 年」

【助成事業】
勝央町ボランティア祭り
ピアノデュオ Duetwo（かなえ&ゆかり）輝く未来へまたあした
早稲田桜子コンサート
勝央金時太鼓保存会活動
勝央町文化協会活動事業

【後援事業】
水木しげる妖怪道五十三次
版画家野田哲也の世界 - 堀コレクションを中心に -
ミュージカル「眠れる森の美女」
国分弘子・夏川りみコンサート
勝央金時太鼓創設 30 周年記念コンサート
第 12 回しょうおう町民音楽祭

その他の事業

1．文化財資料収集保存事業
2．学術的研究及び図書の発刊事業等の
事業を継続しておこなっております。

財団では皆様の貴重なご寄付をお待ちしております！

皆様のご寄付は、地域の文化事業の実施に役立てられています。
ご寄付をいただいた皆様は、税額の控除をうけることが出来ます。

地域の文化活動を応援します！

当財団は、地域の芸術文化振興のための助成活動を実施しております。詳しい内容は、団体 HP をご覧ください。

旧板屋と緑の芸術家たち

山田正雲（やまだ･しょううん／本名 哲（さとし）1901-1964）は、植月村平（現勝央町 平）の山田滝蔵の次男として生まれた。少年の頃から彫刻に優れ、太平洋戦争中は日本原開拓団で開墾のかたわら創作活動を続ける。版画家　棟方志功と芸術論をたたかわすうちその思想に傾倒。志功が主宰する「日本板画院」に連続入選し、1954（昭和 29）年Ｍ婦人賞。翌年、日本版画院会友となる。福島金一郎（ふくしま･きんいちろう 1897-1994）は、小出楢重、鍋井克之らに師事。1926（昭和元）年、二科会に初入選し上京。太平洋画会や前田寛治写実研究所に入って研究を続けた。1929（昭和 3）年渡仏し巨匠ボナールらに師事し。1969（昭和 44）年サロン・ドートンヌに出品した「船着場」がフランス政府買上となりパリ近代美術館に所蔵された。1981（昭和 56）年「公園の人々」が内閣総理大臣賞を受賞。

国道 179 号線沿いに移転した現在の板屋。店内には福島金一郎らの作品が飾られ、絵画を眺めながら休憩できる喫茶コーナーも併設されている。

編 集 後 記

今、まちづくりをテーマに様々な興味深い事業や各種のイベントが、あちらこちらで開催されています。
なかでも、旧出雲街道勝間田宿石畳地区の通り沿いで行われている古民家整備事業では、主を失った古いお宅が、まちづくりの有志やボランティアの方々のおかで、白壁や土間が整備され素敵な建物に改造されていく様子は、傍目に見ていても、とても楽しい時間でした。今度機会があれば、是非自分でも参加してみたいと思います。（EN）

公益財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2017 年 3 月 31 日
編集・発行：公益財団法人美作学術文化振興財団
印刷：友野印刷株式会社

公益財団法人 美作学術文化振興財団

作州路

Vol. 20
2017/3

国道 179 号線を、津山から湯郷に向かってつるやの手前を入ると、そこは旧出雲街道勝間田宿の石畳が整備された通り。その中心辺りに旧板屋の大看板が見えてきます。この看板は、彫刻家山田昭雲の手によるもの。昭雲は戦後、版画家の棟方志功と出会い。志功が主宰した「日本板画院」会友となりました。また板屋は、洋画壇の「二科会」で活躍した洋画家 福島金一郎の生家でもあり、「幼少のころは店の包み紙の裏に絵を描いて父によく叱られました。」と幼い当時のエピソードを笑顔で語っていました。

勝央民話を語る会「ちゃんちゃんこ」の歩み

勝央民話を語る会「ちゃんちゃんこ」

私たち､勝央民話を語る会「ちゃんちゃんこ」は、平成 19 年に民話の愛好者を中心に発足しました。その後「語りをもっと学習したい」との会員の要望が有り、勝央図書館のご協力を得て、岡山県民族学会名誉理事長であり、民話の語り部 立石憲利（たていし のりとし） 先生の『語りの学校』を開講し、本格的に活動を始めました。現在の会員数は12 名で、今年で丁度 10 周年を迎える事が出来ました。

主な活動は毎月 1 回の定例会と、小学校や学童保育・勝央サンサン学園・福祉施設での定期的な語りの会、また、地域や老人会での語り、そして、年 1 回の会員全員による語りの発表会等、活動の場がどんどん広がってきました。もっと範囲を広げると、美作地域各地区 11 グループによる県北ネットワーク交流会、岡山県語りのネットワーク等、たくさんの語りの会に参加し、色々な地域に伝承されてきた民話をその地域に伝わる方言で味わい深く聞き、語らせて頂いています。素朴な昔話や伝説を語るだけではなく、語る人と聞く人が想像をめぐらせながら心を通わせる事により、感性を高め、生きていく為の生活の知恵やおもしろさ、怖さ、厳しさ等色々な心理体験をその時代の文化と共に感じています。文明の発展と共に失われつつある温かみのある方言や昔言葉、人と人との心の機微や温かい思いやりを大切に伝えていきたいと願い日々活動を続けています。

1.『勝央の民話』第一集と第二集

活動していく中で、勝央町に伝わる昔話をもっと沢山語り継いでいきたいと思うようになり、勝央図書館の協力と福武文化振興財団の助成を受け、平成 23 年より町内に埋もれている民話や伝説の聞き取り調査を始めました。あるお年寄りに、地元に伝わる昔話を聞きに行かせてもらった時のこと、テープレコーダーを前に緊張している私たち聞き手の心をほぐすように、その方は村の昔の暮らしやいわれなど､話してくださいました。「ああ、そうなんですか？そうだったんですね！」地元に住んで居ながら知らないことばかりで興味津々（きょうみしんしん）。そのうちに昔話に引き込まれていました。途中、レコーダーを確認してみるとレコーダーが故障していて全く声が入っていない！どうしよう！冷や汗を流しながら、「ごめんなさい！もう一度お願いします！」日を改めて再度お話をしていただきましたが、嫌な顔ひとつせず、本当に感謝です。それから何日かお宅に通わせて頂きました。

こうして、有識者の皆様に沢山の貴重なお話や資料の提供を頂き、5 年の歳月をかけて『勝央の民話』第一集と第二集を発行する事が出来ました。ご協力を頂いた多くの皆様に感謝申し上げますと共に、採話から編集まで全ての面でご指導頂きました立石先生に心より御礼申し上げます。

昔話にたずさわることで、町に伝わる多くの文化や習慣をより知ることができ、色々な本や資料に目をやる機会も多くなりました。また、その時代の文化に直接触れてみたいと、色々な催しにも参加するようになりました。その一つに間山（はしたやま）の「ヤセゴゼ」があります。「ヤセゴゼ」は、古くから間山に伝わる風習で、今なお地域の方々によって伝え続けられています。今年２月に開催された「第９回むかし話をたのしむ会」の様子

2. 今年２月に開催された「第９回むかし話をたのしむ会」の様子

ます。<木像>を背負い薬師堂を無言で３回まわり祈願するもので、すり減って顔かたちすらなくなっている<木像>を手にした時、長い年月多くの人達が背負った歴史を重く感じました。（今年も5月3日に間山で行われます。）

今後の取り組みとしては、若い世代、とりわけ小学生と一緒に語りの会を発展させていきたいという願いを膨らませています。実現できるかどうかわかりませんが、色々な取り組みを考え工夫しながら、『民話』という長い年月をかけて語り継がれてきた大切な伝承文化が、次世代に引き継がれて行く事を願って止みません。皆様方の中に勝央に伝わる昔話をご存知の方が居られましたら、ぜひ当会までご連絡ください。一話でも多く後世に伝えたいと思います。

会員一同、年々齢（よわい）を重ねながらより味わい深く語れるよう精進して参りますので、ご支援ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

勝央民話を語る会「ちゃんちゃんこ」

発足　平成 19 年
会員　12 名
平成 21 年　岡山県語りのネットワーク加入
勝央の民話「おじいちゃん、おばあちゃんにきいたはなし」
平成 24 年　第一集　発行
平成 28 年　第二集　発行

昔から地域で語り継がれてきた、民話が持つ知恵や楽しさ、面白さを、方言と共に次の世代に残し、伝える目的で活動しています。

勝央の民話「痩御前（ヤセゴゼ）」（間山）

昔、間山の興福寺（現在の薬師寺）では、願いのある人やより福を授かろうとする人は、全裸で「痩御前」の木像を反対向きに背負い、無言で薬師寺の周りを三周する「痩御前」がありました。それを見た人々は、手を叩き、「おかしいなあ痩御前」と大笑いしましたが、当の彼らは「ちっともおかしゅうない」と思って笑いません。笑わず無言で行った者は願いが叶い、福を授かり、富裕の身になると言い伝えがあったからです。

その昔、お釈迦様の弟子に「ルイコセイ」という徳が高く尊敬を集める人がおり、彼は昼夜の別なく寝ている者で、つねづね「私の眠りを覚ます者がいたら、どんな願いでも叶えてやる」と言っていました。いろいろな人が目を覚まさせようとしましたが、誰も起こすことができませんでした。ある男女が裸になって眠りを覚まさせようとしたところ、驚くことにルイコセイは目を覚まし､人々は「この男女の姿はおかしくないのですか。」と聞きました。ルイコセイは､「自分は眠たいばかりで、笑うどころではない。だが、人として裸という恥ずかしい姿になってまで私の眠りを覚ましてくれたことは、彼らは真の仏を信じる者です。」と感心し、その男女の願いを叶えたと『梵王経』に書いているそうです。

薬師如来の木像を背負う間山の「痩御前」の行事はこの話が元になり、木像はルイコセイを見立てたものではないでしょうか。現在は服を着て行いますが、間山の興福寺跡の薬師寺では旧暦四月八日の仏生会に毎年行われています。

■引用・参考文献
･平成 28 年３月発行『勝央の民話 おじいちゃん おばあちゃんにきいたおはなし』第二集「痩御前（ヤセゴゼ）」より